

## “真田”もの時代小説次々と

上原 昇（2組）

コロナ禍が長引き、自粛生活を余儀なくされている御同輩が多いことと思います。私も家に引きこもり、毎日本を読んだりして過ごしています。読む本はいろいろですが、最近読んだなかで、所謂“真田もの”が3冊ありました。NHK 大河ドラマ『真田丸』が放映され真田ブームが起こったのは6年ほど前のことですが、今でも“真田”は時代小説家たちに魅力的な対象のようです。読んで見ると、いずれも池波正太郎の名作『真田太平記』（1974年から82年、週刊朝日に連載）に影響を受けていることが分かります。既に読んだ人もいるかと思いますが、ネタバレにならない範囲で簡単に紹介しますので、興味のある人には一読をお薦めします。

1. 『真田の<sup>つわもの</sup>兵ども』(著者：佐々木<sup>こう</sup>功、角川春樹事務所から21年12月刊)

この本では犬伏の別れから上田合戦を経て関ヶ原の戦いまで描いていますが、上田城攻防戦や真田の忍びの活躍に新しい味付けがなされています。

著者は年齢など不明ですが、滝川一益を主人公にした『乱世をゆけ』（2017年刊）で角川春樹小説賞を受賞しています。



2. 『幸村を討て』(著者：今村翔吾、中央公論新社から22年3月刊)

本作では真田昌幸、信之、信繁をはじめ、徳川家康、後藤又兵衛、伊達政宗、毛利勝永など有名な戦国武将が次々に登場・交錯するエンタメ性の高い時代小説に仕上がっています。著者の今村は『塞王の楯』で22年直木賞を受賞している、今年38歳の売れっ子作家です。



3. 『三河雑兵心得 九 上田合戦仁義』(著者：井原忠政、双葉文庫から 22 年 7 月刊)

本作はシリーズで、この第 9 作目が最新作です。本のカバーを見るとシリーズ累計で 65 万部とありますから凄い人気です。

私はまだ全作読んでいませんが、出てくる戦国武将たちがみな人間臭く描かれていて、思わずクスリしてしまう時代小説にては珍しい軽妙な作品といえるでしょう。

本作の前の第 8 作目『小牧長久手仁義』にも真田昌幸が表裏比興之者として出てきますので、一緒に読むことをお勧めします。

著者は何度も筆名を変えるなど、これまで苦労をしてきたようですが、徳川四天王と言われる、酒井忠次、榊原康政、本多忠勝、井伊直政から一字ずつもらった今のペンネームにしたところベストセラーが誕生したとのこと。



同期の皆さんも、面白そうな本がありましたらHPで紹介しますので連絡ください。  
(2022年8月12日記)